

羅什訳『法華経』の語学的研究

—副詞“尽”“悉”“咸”について—

椿 正美

0. はじめに

鳩摩羅什(Kumarajiva)訳『妙法蓮華経』全7巻(以後は略称『法華経』を使用)の文中では、主体や対象に当たる人や物の全てを網羅する表現として、副詞“尽”“悉”“咸”が頻繁に使用されている。何れの読み方も、我が国の訓読法では共に「ことごとく」が用いられ、

“尽”は「序品」“尽見彼土、六趣衆生(「尽く彼の土の六趣の衆生を見…)」。”、“悉”は「薬草喩品」“悉当成仏(「悉く当に成仏すべし)」。”、“咸”は「方便品」“咸皆有疑(「咸く皆疑あり)」。”等に使用例が見られる¹⁾。

牛島1967:180は、古典漢語に用いられる普通副詞を接続副詞、指示副詞、判断副詞、表象副詞、様態副詞、疑問副詞に分類し、“尽”“悉”“咸”は表象副詞に属している。表象副詞は、述語の限定を表す詞の内容に関する「範囲」或いは「程度」を示すものであり、“尽”“悉”“咸”は“亦”“尚”等と共に「範囲」を示す種類に含まれる。

これらの語彙は、全体の文意を解釈する上では、存在の価値を軽視される可能性が高い。しかし、上記のように主体や対象の全てが含まれる状況を強調する表現は、内容の範囲の広さを読み手に伝えるための重要な要素になると捉えられ、それぞれの表示機能について改めて確認することは有意義であると判断される。

本稿では、『法華経』文中に見られる“尽”“悉”“咸”の用例を調査対象とし、それらの使用条件と効果について探る。

1. 『法華経』に於ける使用状況

『法華経』の場合、“尽”17回、“悉”105回、“咸”23回の合計145回の使用が確認された。それぞれの各品に於ける使用回数は、次の通りである。

	尽	悉	咸
序品	1	7	3
方便品	3	3	3
譬喩品	3	6	0
信解品	0	3	0
薬草喩品	0	2	0

授記品	0	1	1
化城喻品	2	5	5
五百弟子受記品	1	2	2
授学無学人記品	0	4	2
法師品	0	0	1
見宝塔品	1	3	0
提婆達多品	0	3	0
勸持品	0	0	0
安樂行品	1	0	1
從地涌出品	2	3	0
如来寿量品	2	4	2
分別功德品	0	2	1
隨喜功德品	0	2	1
法師功德品	0	43	0
常不輕菩薩品	0	1	0
如来神力品	0	1	0
囑累品	0	0	0
藥王菩薩本事品	1	2	0
妙音菩薩品	0	2	0
觀世音菩薩普門品	0	4	1
陀羅尼品	0	0	0
妙莊嚴王本事品	0	3	0
普賢菩薩勸発品	0	0	0
計	17	106	23

上の表によれば、“悉”の使用回数が最も多いことが分かる。その中で「法師功德品」は43回に達し、使用回数が0となるものは6品に過ぎない。

2. 各語彙の使用条件

2. 1. “尽”

2. 1. 1. 字形と字義

まず、字形と字義について確認する。“尽”の旧字“盡”は、“聿”と“皿”の間に水滴を表現

する“𠄎”が加えられた会意文字である。『説文解字』には“器中空（「器中空しきなり」）。”とあり、この字形が器の内部に聿（細い棒）と水分を入れて洗浄する様子を描写したものと記されている。白川1996：871は、器中の洗浄が終尽を示し、全ての傾注、物の究極を意味すると指摘している。

藤堂1965：780は、“盡”は食べ残した末に細切れのみが皿中に遺された様子を描写したものであり、全部出し尽くす意を示す動詞として用いられ、副詞に転じた用法として「尽（ことごと）く」が用いられたと述べている。例えば『韓非子』「内儲説」“左右無人、尽逐獸而火不救（「左右に人無し、尽く獸を逐ひて、火を救はず」）。”では、“逐”という行為の実行が描写され、全ての“獸”が対象に含まれることが“尽”によって強調されている。

2. 1. 2. 『法華経』での使用例

『法華経』文中に見られる例文を次に挙げる。

(1)T09-0008B

若我遇衆生、尽教以仏道。（方便品）

若し我衆生に遇えば、尽く教うるに仏道を以てす。

(2)T09-0037C

凶險相撲、種種嬉戯、諸姪女等、尽勿親近。（安樂行品）

凶険の相撲、種種の嬉戯、諸の姪女等に尽く親近することなかれ。

(1)では“教”が行為に当たり、“衆生”が対象となる。ここでは、“若”の前置により、仮定の表現が構成されている。(2)では“親近”が行為に当たり、“凶険相撲、種種嬉戯、諸姪女等”が対象となる。ここでは、“勿”の挿入により、禁止の表現が構成されている。

王力1964：1619は、副詞“尽”の機能について、形容詞の前に置かれた場合は「頂点に達した」ことを表示し、動詞の前に置かれた場合は「残らず」「一切」を表示すると述べている。これに従えば、(1)(2)で用いられた“尽”は後者に当たり、対象者の範囲内に例外が含まれないことを強調したと捉えられる。特に対象が明らかに複数である(2)の場合では、その機能が有効的に発揮されたと認められる。

2. 1. 3. 主体や対象の数量

既に述べたように、“尽”に修飾された動詞の主体や対象は、条件が該当する全ての人や物を含んでいるので、当然、(2)にも見られるように、数量的には複数となる。但し、その数値は様々であり、範囲は非常に幅広い。

まず、対象や主体が多量となる例を次に挙げる。

(3)T09-0028C

尽同一号、名曰普明。(五百弟子受記品)

尽く同じく一号にして名けて普明といわん。

(4)T09-0040A

先尽在、娑婆世界之下、此界虚空中住。(従地涌出品)

先より尽く娑婆世界の下、此の界の虚空の中に在って住せり。

(3)では“名曰普明”、(4)では“住”が行為に当たる。それぞれの主体は(3)(4)の文中に含まれていないが、既に揭示された内容から(3)の主体は“五百阿羅漢”、(4)の主体は“無量千万億菩薩摩訶薩”であると判明し、その数量が膨大であることが確認される。

次に異なる意味を含む2つの事柄となる例を挙げる。

(5)T09-0012A

我所有福業、今世若過世、及見仏功德、尽廻向仏道。(譬喩品)

我が所有の福業、今世若しは過世、及び見仏の功德、尽く仏道に廻向す。

(6)T09-0022A

若点不点、尽抹為塵、一塵一劫。(化城喩品)

若しは点ぜると点ぜざるとを尽く抹して塵となして一塵を一劫とせん。

(5)では“廻向”が行為に当たり、主体の条件に“今世”と“過世”が含まれる。(6)では“抹”が行為に当たり、“点”と“不点”が対象となる。これらの使用例から、“尽”により強調される内容の範囲には、対象的な価値を有す2つの語彙も含まれることが分かる。

2. 2. “悉”

2. 2. 1. 字形と字義

まず、字形と字義について確認する。“悉”は“采”と“心”の会意文字である。この“采”は獣の爪、“心”は心臓を表すことから、白川1996:695は、爪によって内臓を取ることを意味すると指摘している。

藤堂1965:780は、“采”が「種を細かく分散させる」を意味する“播”の原字であることから“悉”は細かく分けた隅々まで心を届かせることを示すと指摘している。例えば『史記』「越生家」呉王聞之、悉発精兵撃越、敗之夫椒（「呉王之を聞き、悉く精兵を発して越を撃ち、之を夫椒に敗る」）。では、呉王が全ての“精兵”を出したことが“悉”によって強調されている。

2. 2. 2. 『法華経』での使用例

『法華経』文中に見られる例文を次に挙げる。

(7) T09-0014C

今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子。(譬喩品)

今此の三界は、皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり。

(8) T09-0033B

如是次第、十方諸仏、皆悉来集、坐於八方。(見宝塔品)

是の如く次第に十方の諸仏皆悉く来集して八方に坐したもう。

(7)では“其中衆生”が主体に当たり、全て“吾子”に該当することが表されている。(8)では“十方諸仏”が主体に当たり、“来集”以下の部分が主体の共通する行為であることが表されている。

“悉”の語義について、王力1964:1621は、原義から派生して「詳細」「詳尽」の意になったと述べ、それについては『説文解字』にも“詳盡也(「詳尽なり」)。”と記されている。(7)“是吾子”(8)“来集坐於八方”は、主体に含まれる全ての者が該当する共通の状況、または実現する共通の行為を指し、それに前置される“悉”の機能は「詳尽」の強調と解釈される。

2. 2. 3. 動詞と目的語との位置関係

“悉”構文に於ける動詞と目的語の位置関係は、決して固定されたものではない。目的語に対して特に重点が置かれる場合には、それが動詞より前部に置かれる可能性もある。従って、動詞と目的語の位置関係は、文意を正確に判断するための根拠ともなる。

まず、動詞の後部に目的語が置かれた例を挙げる。

(9) T09-0004C

因仏光所照、悉見彼大衆。(序品)

仏の光の所照に因って、悉く彼の大衆を見る。

(10) T09-0041B

今皆住不退、悉当得成仏。(従地涌出品)

今皆不退に住せり、悉く当に成仏を得べし。

(9)では“彼大衆”が動詞“見”、(10)では“成仏”が動詞“得”の目的語に当たる。何れの場合も目的語が動詞の後部に置かれている。

これとは逆に、“悉”の使用例には、動詞の目的語が前部に置かれたものもある。そのような例文を次に挙げる。

(11) T09-0023A

欲楽及修福、宿命所行業、世尊悉知已。(化城喩品)

欲楽及び修福、宿命所行の業、世尊悉く知しめし已れり。

(12) T09-0048A

無数種人声、聞悉能解了。(法師功德品)

無数種の人声、聞いて悉く能く解了せん。

(11)では“欲楽及修福、宿命所行業”が動詞“知”、(12)では“無数種人声”が動詞“解了”の目

的語に当たる。何れの場合も目的語が動詞より前部に置かれている。

(1)(2)の目的語の内容には重大な価値が含まれ、しかも多数である。ここでは動詞に託された、特に多数という数量的な条件への完璧な対処が表現され、確かに“悉”独特の「隅々まで心を届かせる」の表示機能が発揮されたと解釈される。

2. 3. “咸”

2. 3. 1. 字義と字形

まず、字形と字義について確認する。“咸”は“戔”（まさかり）と“口”の会意文字であり、刃物によって容器の口を封じる様子が表されている。『説文解字』には“皆也、悉也（皆なり、悉なり）。”と記され、そこでは“悉”と同じく「詳尽」を表すと解釈されている。

藤堂1978：230は、“緘”“含”と同系で封じ込む意を含み、転じて「おしなべて、みな」の意に用いると指摘している。例えば陶淵明「桃花源詩并記」“村中聞有此人、咸來問訊（「村中、此の人あるを聞き、咸な来たりて問訊す」）。”では、全ての村民が集合した状態を示すために“咸”が使用されている。

2. 3. 2. 『法華経』での使用例

『法華経』文中に見られる例文を次に挙げる。

(13) T09-0010A

志求仏道者、無量千万億、咸以恭敬心、皆來至仏所。（方便品）

仏道を志求する者、無量千万億、咸く恭敬の心を以て、皆仏所に來至せり。

(14) T09-0027C

彼仏世人、咸皆謂之、實是聲聞。（五百弟子受記品）

彼の仏世の人咸く皆、之を實に是れ聲聞なりと謂えり。

(13)では“志求仏道者”が主体に当たり、“來至仏所”が行為となる。(14)では“彼仏世人”が主体に当たり、“謂之、實是聲聞”が述語となる。

楊劍橋2010：59によれば、“咸”は範圍副詞に属し、“凡”“徧”等と共に「全部」を表示する類に含まれる²⁾。(13)(14)の場合は主体が多数であり、その全部が行為の実行者に含まれることを強調するために、このような“咸”の表示機能が活用されたと判断される。

2. 3. 3. 強制を示す形式

“咸”は前後フレーズ間に連続や因果等の関係が成立する文体にも多く使用され、範圍や程度を示す上で効果を發揮している。そのような例文を次に挙げる。

(15) T09-0022C

是故咸稽首、帰命無上尊。(化城喻品)

是の故に咸く稽首して、無上尊に帰命したてまつる。

(16) T09-0024B

我等咸帰請、当演深遠音。(化城喻品)

我等咸く帰請したてまつる、当に深遠の音を演じたもうべし。

(15)では“稽首”が行為に当たり、前後フレーズ間に連続関係の成立が認められる。(16)の場合は“帰請”が行為に当たり、前部フレーズで理由が揭示され、後部フレーズで〈当然〉の表現が続いている。

“咸”に含まれる「全部」の表示機能は、(16)のように相手に行為を強制する表現では、主体や対象の網羅を示し、それらが含まれる範囲や強制の程度の表示に効果を發揮している。そのような例文を次に挙げる。

(17) T09-0038A

以諸因縁、無量譬喩、開示衆生、咸令歡喜。(安樂行品)

諸の因縁、無量の譬喩を以て、衆生に開示して、咸く歡喜せしめよ。

(18) T09-0047B

汝等咸应当、疾生厭離心。(隨喜功德品)

汝等咸く应当に、疾く厭離の心を生ずべし。

(17)では“歡喜”、(18)では“生厭離心”が行為に当たる。(17)の場合は、動詞に“令”を前置させることにより、使役形式が構成されている。対象には全ての“衆生”が含まれ、それを強調するために“咸”が置かれたと解釈される。(18)の場合は、“应当”の挿入によって強制を示す形式が構成されている。ここでも主体には“汝等”に属する全ての者が含まれている。

3. おわりに

副詞“尽”“悉”“咸”の表示機能は、使用例を見た限りでは、全て同類のものと解釈される可能性は高い。しかし、それぞれの語彙について原義まで探れば、表示する内容が微妙に異なり、使用の条件や効果に違いが存在することが確認できる。その中で“悉”は『法華経』全文中で頻繁に使用され、使用回数が最多の106回に達している。

“悉”の表示内容は、主体や対象の状況に対する「詳尽」となる。本論で述べたように、多くの先行研究に基づけば、“悉”は主体や対象に当たる各事物の存在を重視し、その内容は「全部」を強調する“尽”や“咸”よりも細かいと解釈される。このような表示機能を發揮する“悉”が多く適用された状況は、『法華経』の文意の性格との関連が深く、特に使用回数が43回となる「法師功德品」の場合は、内容の傾向を判断するための根拠となる。

以上のように、副詞“尽”“悉”“咸”には様々な語義や使用条件が含まれ、それらは文意を

正確に解釈するための重要な要素となる。従って、“尽”“悉”“咸”の存在価値は常に重視すべきであると判断される。

〈参考文献〉

- 牛島徳次1967.『漢語文法論（古代編）』大修館書店。
王力1964.『古代漢語（第四冊）』中華書局。
白川静1996.『字通』平凡社。
藤堂明保1965.『漢字語源辞典』。
藤堂明保1978.『漢和大辞典』学習研究社。
楊劍橋2010.『古漢語語法講義』復旦大学出版社。

〈注記〉

- 1) 多くの辞書類や参考書では、“咸”の読み方は「みな」と紹介されているが、『法華経』の研究書では“尽”“悉”と同じく「ことごとく」と紹介されることが多い。これに従い、本論では“咸”も類義語として扱った。
- 2) 楊劍橋2010によれば、範圍副詞の機能には「全部」の他に「局部」「共同と相互」がある。

〈キーワード〉

副詞 範圍 詳細 詳尽 全部